

京鹿子



昭和二十三年九月二日第三種郵便物認可
平成十八年十月一日、日、発行
通巻九八六号、毎月一回、一日発行

10月号

鳥わたる

丸山佳子

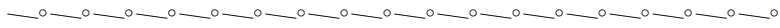
秋惜しむ人に顔あり樹に枝あり

御神樹は地球の鏡鳥わたる

蛇穴につひこの間初対面

氏神にま向つてゐる種案山子





あ
行
か
ら
こ
れ
程
赤
く
青
柿
が

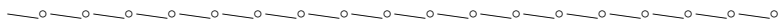
平
常
心
平
常
に
と
蜜
柑
む
く

学
ぶ
と
は
賜
は
る
中
元
包
み
に
も

も
ぎ
取
ら
れ
ゆ
く
を
見
送
る
木
守
柿

扇
ふ
は
ふ
は
ア
メ
リ
カ
人
も
祇
園
人

朝
顔
の
巻
い
て
開
い
て
青
い
空



豊田都峰

清響集 その六十六

万緑をひと盛りあげて皇子の陵
蝉しぐれ韋駄天はまだ序の走り
魚柳や青水無月と告げわたる
経版木積み上げ青葉山の嵩
墓洗ふ植ゑたるものにかげを得て
大文字わが風景の真ん中に



爆忌来る蛇口に絶えることはなく
ねこじやらしわが一隅の風のなか
夕蟬や石仏もまたうすれゆく
おはぐろのみちびいてゐる水の音
草先のとんぼよ愛宕より高し
流木のなかば埋れて晩夏なる
また石に座して晩夏の水ひとり

俳句四季十九年二月号「新作家訪問」掲載

秀華採集

蜻蛉生る湖乳色の風に醒め

松本鷹根

「湖乳色の風」と誕生の瞬間を包んだところに、作者の命への思い入れがある。「湖風の地」の花南瓜にしろ、湖国への取り付かれ方は関心を引く。

もつれてももつれても蝶音たてず

滝沢環

撫でつける髪の毛の痩せけり額の花

竹内久子

前句の蝶の飛び方の実感、実相的といってよい。後句の「額の花」のあしらいが抜群の効果をもたらしている。

鈴鹿 仁

つくつくし

来世とは善意に思ふつくつくし
石蹴つて石の昂り嵯峨素秋
少年の無垢な瞳にある白秋
鮎の瀬の滾ち一村消えてゆく
節目てふ二字の重さよ星月夜
竹の春風に誘はれ妣の國
秋の蚊を返り討ちして屯所跡

近 詠

宇都宮滴水

をとり鮎

鍵束の中の一つに秋かすか
匣鮎水に流せし涙あと
分水嶺涼しさもらふ風に逢ふ
白日傘覗かれてゐるうしろ髪
まいまいの一息入れる雲の上
鍵穴の向かう白ける秋はじめ
水母活く狂ひしままの羅針盤

神麓集



林 日圓

大原や魚山声明蝉しぐれ
大原の呂川律川蝉涼し
声明の音階涼し魚山さと
滝音と声明和して音無に
夏の昼呂律茶屋にてなごみけり

横須賀菖蒲園 北村 香朗

八ッ橋に歩み緩めつ花菖蒲
殊に大輪「錦の波」てふ花菖蒲
みの笠が花殻を摘む菖蒲園
誇るがに咲く花菖蒲「綾衣」
花菖蒲の彩の変化に眩暈ふと

夏一景 丸山 冬鳳

杉どころ霧の尾根すぢ夏一景
合掌の恩師かづかづ花南天
句碑の寺葉うらがくれの柿の独樂
木々草々蔭を重ねて風青田
両手つき我慢蛙の背日和

松本 鷹根

紫陽花に紅きざしゐて不眠症
梅雨晴間雀の会話否定なし
黒南風の葉裏騒ぎの白なびき
合歡咲きて筒城つづきの風を招く丘
星祭る家内安全ただ願ひ

夏が来る 森津 三郎

蔓薔薇は真赤に洋舞教習所
猫探すビラ梅雨晴れの映画村
古墳とは紫田平子石に咲く
河原にも茂りがあつて渡来の址
後ろ向き歩く先生夏が来る

七夜月 丸井 巴水

天牛を抓む背後で夜叉の聲
中流と言はれひさしき水室菓子
惹きつける言葉は要らず梅雨菌
影もたず穴の暗きへ帰る蟻
花水そとは眩しきひとばかり

神麓集



耳飾はづし青夜の多感なる
少年の羽化待つてゐる青岬
仮縫のままで咲いてる花菖蒲
万緑や木綿を絹に変へし風
父の日の父と来てゐる定食屋

松田 都青

七月の胸ゆたかななる夫人たち
偽りの盛装として水中花
明易の枕にひびく鼓動音
ゆくりなく虹つれてくる日照雨かな
冷房や鍵穴からも呼気吸気

川崎 光一郎

秋深し 竹貫 示虹
人戀^ずひの紐引いて消す秋灯
百舌鳥日和待合室の椅子固し
戦あるな浮塵^ん子に拳ふりまはす
秋天に限りのあらず「悲愴」鳴る
夜明けまだ小鳥らは足ふみ替へて

高橋 千美

山内のどこも水音明易し
青簾をりをりを渉る鐘の音
本尊はまだまだ奥よ蟻の列
朝焼や鷺も鴉も一つ田にあぢさゐの雨ともならず観世音

多佳子忌 北川 孝子
青水無月よちよちの歩の翻り
手を触れてペン胼胝同志蚩の夜
豊穰なことばに惹かれ多佳子の忌
空咳のしきりや梅雨の月細し
山法師また大原にひとりの歩

時 伊藤 希眸

河骨咲く沼の一と時烟りだし
羅に時を数へて帰郷せり
からくり時計涼し飲食くりかへし
盆火焚くぼうと時空の父と母
鎖骨に汗ためて時報の鐘を打つ



京鹿子集

豊田都峰選

湖風の地に這うてみて花南瓜
 苺熟れ紅のとがりの恋はじめ
 立葵捨て咲きにして土手高し
 川落差ただ純白の梅雨仕立て
 蜻蛉生る湖乳色の風に醒め
 花菖蒲ことば足らずの雨がいい
 むかしより昔ありけり蟬の穴
 吐き出して嘘一つ減る枇杷の種
 もつれてももつれても蝶音たてず
 すかんぼや暗がり抜けてゐる記憶

城陽 松本 鷹根

東京 滝沢 環

軽鼻の子の太郎花子に雨上り
 万緑や赤子の頬のなみだあと
 仁王尊振り上ぐ拳雲の峰
 母がりの重き長靴螢狩
 撫でつける髪の瘦せけり額の花
 鯨観に行かう今朝より花粉症
 なにはさて新茶を飲んでからのこと
 万畳の岩のまなかを滴れり
 徘徊のゆくても知らず五月闇
 栗咲きて神は八十島生み給ふ

京都 竹内 久子

千葉 河内 桜人